

# C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

RIITALIA (イタリア再発見) ⑭

## \*規則と自由\*

国司 航佑

イタリアに行ったことがある方はご存知のことかと思うが、この国の公共交通機関を利用する際のルールは、日本のそれと大きく異なっている。ほとんどの地下鉄の駅には改札がなく、またバスを降車するときも運転手の前を通過して運賃を支払ったりする必要がない。切符の購入は当然乗客に義務付けられていることなのだが、それを一括してチェックするシステムが存在していないのである。筆者は、イタリアで初めて公共交通機関を利用したとき、そのことをとても不思議に思った。まったく点検されないのにも拘らず、イタリア人はしっかりとチケットを購入するものなのだろうか。



【ナポリの地下鉄の駅の様子】

イタリアでの生活に慣れてきた頃、こうした疑問はほとんど解消されていた。イタリア人も聖人君子ではない。チェックがされていないことをいいことに、切符を買わずに公共交通機関を利用してしまふ輩も存在する(特に若者)。だが、そうした行為にも、リスクが伴っていないわけではない。controllore と呼ばれる人間が不定期的に車内に

現れ、無賃乗車を取り締まっているからである。切符をもっていないことが発覚すると、15 ユーロ(約2000円)ほどの罰金を払わされる。ただし、手慣れた連中は、controllore が登場するやいなや一目散に逃げおおせるので、やはり運賃を支払う羽目にはならないようである。

筆者はイタリアに住んでいるとき、一緒に移動している友人がチケットを購入しないというような場面に何度も遭遇した。最初の頃は、そういう時、悪いことをしているなど思いつつも切符を購入せずに乗車してしまっていた。雰囲気やルールを守ろうとは思わなかったのである。だが彼らのうちにも、時にはその場の雰囲気やルールを全く気にせずしっかりと切符を購入する人間もいた。筆者の目に映ったその人物の毅然とした態度は、なんと格好よかったことか。そしてそれに対して、自らの軟弱な態度はあまりにもみっともなかった。もちろん、無賃乗車をけしかけた連中が一番の悪者であることは間違いない。だが、彼らはそれを「悪いことをしている」という自覚なく行ったのではないだろうか。それに対して筆者は「悪いこと」と重々承知しながらなおも悪事をなしたのである。筆者の行為は、ただ単に軽犯罪を犯したということ以上の意味をもっていたように思われる。

ナポリに滞在していたとき、筆者の日々の生活は軽犯罪と隣り合わせのものだった。無賃乗車だけではない。信号無視、違法駐車、脱税、ひったくり、ぼったくり、薬物乱用等々、枚挙にいとまがないほどの多種多様な軽犯罪が横行していたので

ある(今も横行しているだろう)。もちろん、ナポリ人であっても、こうした軽犯罪に染まらない人間たちも存在している。だが、そのような人物の模範的な振る舞いも、ただ単に規則を守ろうとする意図から生まれるものではないようである。例えば、赤信号を無視して横断歩道を通るのがナポリ市民の一般的な自動車運転のあり方なのだが、それに反して、青信号であれどのような状況であれ、困っていそうな歩行者を優先して通そうとする、絵にかいたような善人もいる。こうした善行は、ただ単に規則を守るということを目的にした行為だとは言いえないだろう。むしろ、規則を破ってでもとにかく自らの正しいと思うことを実行しよう、そのような強い意志が裏に潜んでいる行為なのではないか。彼らにとって大事なものは、規則の有無ではなく、その規則の妥当性であり、またそれによって体現される善そのものなのであろう。規則を守る人もそうでない人も、この土地の人間の行動の基準となっているのは自らの意志であるといつてよいのではないか。

しかし、そもそも規則とは、その妥当性とは関係なく遵守されるべきものではないだろうか。自分が納得いかないからといって各人が規則を破りだしたら、社会は立ち行かなくなるだろう。例えば、イタリア人の多くは、なかんずく南イタリアの人間の大半は、国家による課税システムを不当なものみなしている節がある。だからこそ、現実世界において脱税が信じがたいほどに横行しているのである(ナポリでは、人口の半数が脱税しているとまで言われている)。彼らの言い分は、政治界に住まう金持ち連中がお金にかかわるスキャンダルを頻繁に起こしているのに、貧しい自分たちが真面目に納税しなければならない理由はどこにもないはずだろうというものであった。なるほど、彼らの言うことにも一理あるかもしれない。課税システムに関しては、わが国でも累進課税をどの程度の割合にするのかという問題について議論をすれば意見の分かれることであろう。だが、一旦ある課税システムを採用してしまったのなら、国民一人一人は、その妥当性の問題に関する自らの見解を棚上げしつつ、とにかくそのシステムに従って納税する義務があるはずではないだろうか。

日本社会においては、ルールを守ることの重要性は改めて確認する必要がないほどに浸透している。ところがイタリア人の多くは、一つ一つのルールに対して疑ってかかる性分を持ち合わせている。もちろん、どんなルールも、人間が作ったものである以上、不完全である可能性を排除することはできないから、疑うという行為自体は非難すべきものではないだろう。しかし、だからといって一人一人が自分の見解に従ってルールを破り始めてしまえば、社会は成り立つわけがない。今日のイタリアという国家の停滞・腐敗はそういう民族的な特徴に端を発しているのかもしれない。

規則を尊重しないというイタリア人の民族的気質は、古くから指摘されてきたことである。実を言うと、第一次世界大戦の後に登場したファシズムは、こうした態度を倫理的墮落とみなしつつ、それに対抗しようとした運動でもあった。戦後、ファシズムに関わったとされる物事はおしなべて断罪の対象となったから、ファシストたちの言説がこんにち肯定的な意味合いで取り上げられることはほとんどない。だが、先入見を交えず彼らの言葉をそのまま読んでみると、その説得力の強さに驚かされることになる(無論、彼らのその後の愚行を考慮に入れずには、そうした言葉の真意は理解されないだろうが)。例えば、当時文科大臣を務めていた哲学者ジョヴァンニ・ジェンティーレが起草し、1925年に発表された「ファシスト知識人たちの宣言」。当時のイタリア人の倫理的腐敗を痛烈に批判するその文言は、現代のイタリア社会にもそのまま当てはまるものだろう。「個人対国家。この表現は、この時代に見られる腐敗の政治的側面を典型的に示している。それは、人間の生に関する上層からの規則、個人の感情・思想を精力的に支えかつ包み込むような規則をまったく耐え忍ぶことができない時代なのである」。

ジェンティーレが思い描いていた国家像は、倫理国家(Stato etico)と呼ばれるものであったが、その発想の根幹にあったのはヘーゲルの哲学である。国家こそが国民の自由を保障する母体なのであるから、国家そのものの妥当性は国民一人一人によって議論されるべきではない。従って、国家は国民に干渉されえない巨大な権利を保持

するべきである。このようなヘーゲルの議論を当時のイタリアに適応したジェンティーレは、国民に対して国家が圧倒的な優位に立つ必要を論じた。イタリア半島の歴史は、個々人の思惑が国家統一を妨げ続けた歴史でもある。国家に対する人々の不信は、フランス、スペイン等の欧州列強の侵略という惨事を招く要因にもなった。第一次世界大戦を機に国家に対する国民の不満が募っていた当時、個人の自由を制限し国家の権力を拡大させることは、ジェンティーレにとって切実な(そしておそらくは誠実でもある)思いだったのではないだろうか。



【ジェンティーレ(左)とムツソリーニ(中央)】

「ファシスト知識人たちの宣言」に対して自由主義の立場から反論したのは、ジェンティーレの盟友にして宿敵、哲学者ベネデット・クローチェである。クローチェは、第二次世界大戦の終結に至るまで、その学問的影響力によって、反ファシズム勢力の精神的支柱であり続けた人物である。だが、「反ファシスト知識人たちの宣言」に示されたクローチェの言葉は、筆者にはどうも強い印象を与えない。クローチェは、ジェンティーレの議論の論理面における拙劣さを指摘するのみであり、当時のイタリアが抱える問題に対して納得のいく解決策を提示しているようには思えないのである。彼の発し続けた「自由」という言葉も、当時の社会においては空しく響くものだったに違いない。というのも、個人が自由を過度に主張する風潮こそが、イタリアの倫理的頹廢の要因の一つだった(とみ

なされていた)からである。

クローチェはその後、ファシズム勢力の拡大と比例させるかのごとく、日増しに自由という概念に重きを置くようになっていく。1932年に発表された『19世紀ヨーロッパの歴史』という著書においては、ヨーロッパの歴史は自由の拡大の歴史にほかならないとまで述べている。自由が危機に瀕していた時代にあつて、クローチェがその理念をこれほどまで信じ続けることができたのはなぜか、その理由は定かではない。そこで興味深く筆者の目に映るのは、この時期にクローチェがキリスト教の再評価を始めていたという事実である。1938年の作品『我々はなぜ自らをキリスト者と呼ばざるをえないのか』において、クローチェは、他のどの思想・宗教にもましてキリスト教こそがヨーロッパ文化に絶大な影響を与えたと述べている。というのも、例えばユダヤ教やギリシャ哲学といった他の宗教・思想が習慣や規律を貴ぶ傾向にあったのに対して、キリスト教は人間の内面に働きかける宗教だったから、と言うのである。

自由と規律——相対立しているように見えるこの2つの概念は、クローチェ的な考え方をするならば、キリスト教の理念を通じて共存できるものである。その教えの下で求められるのは神との対話のみであるから、人は、他者からの制約を受けずに、また個人の自由を守りながら、同時に善を目指すべき存在なのである。

神が死んで久しいとされるこんにちの西洋社会では、クローチェのこのような考え方が容易に受け入れられることはないだろう。神をもとから知らない日本人の筆者にとっても、それが非常に説得力のある議論だとは思えない。だがしかし、暗闇の立ち込める現代において希望のある未来を描き出そうとするならば、やはり各人が自らのうちに自由と規律とを共存する形で育てていく以外ないのかもしれない。

【図版の出典】

[http://it.wikipedia.org/wiki/Metropolitana\\_di\\_Napoli](http://it.wikipedia.org/wiki/Metropolitana_di_Napoli)

[http://it.wikipedia.org/wiki/Giovanni\\_Gentile](http://it.wikipedia.org/wiki/Giovanni_Gentile)

(元当館スタッフ)



## 『素晴らしき自転車レース⑱』

### サイクリストの守り神 ギザッロ教会

谷口 和久

昨年 5 月、イタリア北部のモルティエーロ峠に挑戦した旅の途上、コモ湖の近くにあるギザッロ教会を訪れた。位置的には、漢字の「人」の形をしたコモ湖のちょうど股のあたりの、小高い山の上にある。ここは第二次大戦後、時の法王ピウス 12 世によって正式にサイクリストの守り神として布告された由緒正しき教会である。1949 年の布告の際には、時のトップレーサーであったジーノ・バルタリやファウスト・コッピらがローマからの聖火をリレーで運んだのである。



【ギザッロ教会】

教会そのものは、中世期に土地の有力者であるギザッロ伯が山賊に襲われた折に、聖母マリアに願をかけて難を逃れ、教会を寄進したことから名づけられた。そして教会の中には「授乳の聖母子」像がまつられている。

「授乳の聖母子」像とは、聖母マリアが胸をはだけて幼子キリストに授乳している場面であり、お堅い(?)キリスト教とは一見そぐわないように思えるが、ルネサンス期にはよく描かれた題材らしい。ただ、のちの 16 世紀半ばに開かれたトレント公会議において、聖書に書かれていない場面を

描くことが批判されたのを機に、以降は描かれなくなったという。ここギザッロの聖母は、どこかあどけない面立ちで、素朴なタッチがなんとも微笑ましい。抱かれたイエスが右手をかざして人差し指と中指を立てているのは、よく見られる図像だが、ギリシャ文字で「イエス・キリスト」であることを表している。



【ギザッロ教会の聖母子像】

ギザッロ教会のあるロンバルディア州は、もともと自転車の盛んな土地で、教会のすぐ脇の道もジロ・ディ・ロンバルディアというレースの舞台となっている。

ジロ・ディ・ロンバルディアは 1905 年、すなわちジロ・ディ・イタリアに先立つこと 4 年前にスタートした、伝統あるレースである。ジロ・ディ・イタリアが 1 か月近くかけてイタリアを一周するのに対して、ジロ・ディ・ロンバルディアはロンバルディアの山々やミラノ、ベルガモ、レッコといった州の主要都市を 1 日で走りきるレースである。コースは年によって変わるものの、コモ湖周辺の険しい山道が舞台となり、ギザッロ教会の脇が必ずコースに組み入れられる。選手たちが教会の脇を走り過ぎるときには鐘が打ち鳴らされ、観衆の興奮は最高潮に達する。

時期的には9月末や10月に開催されるので、別名「落ち葉のレース “La classica delle foglie morte”」とよばれ、シーズンを締めくくる主要なレースに位置づけられている。

主要なレースだからというわけでもなからうが、第一次大戦中も途切れることなく毎年開催され、第二次大戦中にも2回だけしか中止されなかった(1943, 1944)。「国家総動員」「一億総火の玉(?)」の日本人からは考えられないことだ!

過去の優勝者には、初代カンピオニッシモであるコスタンテ・ジラルデンゴをはじめ、歴代カンピオニッシモのアルフレード・ビンダにファウスト・コッピ、コッピのライバルであったジーノ・バルタリ、史上最強のレーサー、エディ・メルクスに、ベルナルド・イノー。錚々たるレーサーたちが名を残している。

最多優勝を誇るのはファウスト・コッピの5勝(1946, 1947, 1948, 1949, 1954)だが、コッピはこのレースでほろ苦い逸話も残している。

1956年のジロ・ディ・ロンバルディアでのこと。すでに全盛期を過ぎた37才のコッピは、おのれが5勝を飾ったこのレースで再起をかけていた。若手選手がギザッロでアタックをかけたのに反応し、2人でミラノのゴール目指して快調に飛ばした。うしろでは、当時バルタリ、コッピについて「第3の男」とよばれていた、実力者のフィorenzo・マーニをふくむグループが追い上げをかけていた。そのマーニに対して、チームカーに同乗していたコッピの情人が、車の中からマーニを侮辱するようなジェスチャーをとったのだ。

さて、ここでコッピの情人について少し説明が必要だろう。情人の名はジュリア・オッキーニ。コッピもジュリアも、それぞれ家庭を持つ身でありながら許されぬ恋に落ちた。今でもイタリアは離婚が非常に難しい国であるが、当時はそもそも離婚が認められていなかった。そのような時代に、2人は互いの家庭を捨てて結ばれたわけだ。当然、社会的反発は強かった。また、ジュリア自身も一

癖も二癖もある女性だったようで、ことに敬虔なカトリック信者であるバルタリやマーニはこころよく思っていなかった。ちなみに、離婚を認めないというカトリックの「婚姻の秘跡」は、先に上げたトレント公会議で正式なものとされたという。

そのような背景の中で、情人ジュリアはマーニを小バカにするような態度を取った。激怒したマーニは、自分が勝つことよりも、とにかくコッピを勝たせないことに全力を傾けた。猛烈に集団を引っばって、ゴール手前でコッピたちに追いつき、最後は自分が引っばってきたフランス人選手がコッピを差しきるのを見て、溜飲を下げたのである。後ろでそんなことがあったとはつゆ知らぬコッピは、最後の大きなチャンスをさらわれて、人目をはばからず号泣したのであった。コッピは以後、勝ち星に恵まれず、4年後にはわずか40才でマリアにより命を落としたのである。



【ギザッロ教会の前に建つ、勝者と敗者の像】

ギザッロ教会を訪れたときに話を戻そう。本来であれば自転車でいきたい、いや行かなければならないところであったが、あいにくの氷雨で、軟

イタリア発月刊日本語新聞

**COMeVA!**  
Pubblicazione mensile distribuita in Italia e in Giappone

イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

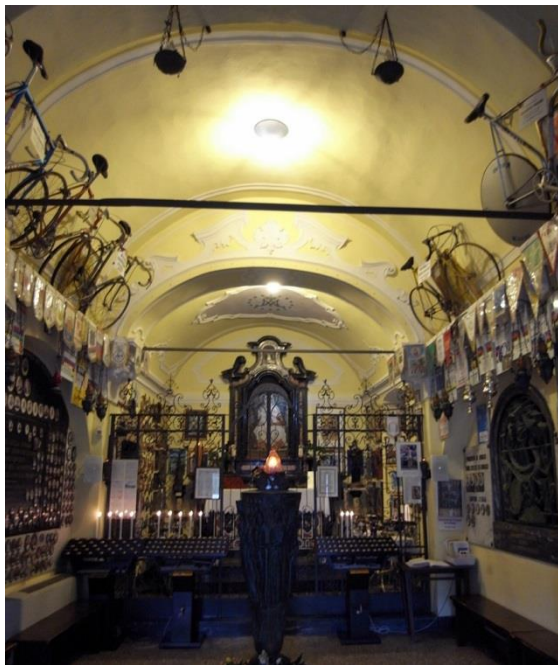
編集・発行 NIPPON CLUB SNC  
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy  
Tel. & Fax : (06) 4743. 212  
E-mail : comeva@nipponclub.it  
URL : www.nipponclub.it

弱にも車で向かった。コモ湖の東南にあるレッコの町からゆるやかな坂を上りつめると、開けた山上の村マグレーリオ Magreglio に到着する。

それまで写真で見ていたイメージとくらべると、かなりこぢんまりとしたサイズの聖堂であった。もし周囲に建物が密集していたら、まったく目立つこともなかろうが、おそらく地元できちんと管理しているのだろう、周囲は開けて、コモ湖や周辺の山並みがきれいに見渡せる立地だ。

中に入ると、ずらっと壁にかけられた自転車に圧倒される。コッピやバルタリに始まり、メルクス、そしてマルコ・パンターニなど、往年の名選手たちが献納したものである。どれも実際にレースで使われていた自転車ばかりで、見ていると胸の奥に震えを覚える。また、壁には小さな顔写真が多数貼られており、これは自転車事故で亡くなった選手やホビーレーサーを弔うために、遺族が納めたものだという。

そして、堂の奥には先に紹介した授乳の聖母子が、選手たちを見守るかのように鎮座している。



【ギザッロ教会の内部】

教会の横には自転車博物館があり、教会内におさまりきらなかったおびただしい数の自転車が

展示されている。この博物館の初代館長は、1956年にこの地でコッピに引導を渡した、フィオレンツォ・マーニその人であった(2012年逝去)。



【ギザッロの自転車博物館】

イタリアをはじめとしたヨーロッパにおいては、自転車競技というものが、単なるスポーツの枠にとどまらず、歴史や宗教、人と人がおりなす様々な相関図の中に位置づけられている。この教会に来て、「自転車は文化である」という言葉が実感をもって感じられたのであった。

#### 【参考資料】

William Fotheringham, *A Century of Cycling*, Motorbooks Intl, 2003

Beppe Conti, *Ciclismo, Storie Segrete*, ECO, 2003

Ugo Della Torre, *Coppie e Bartali*, DeAGOSTINI, 2009

『聖母マリアの謎』(石井美樹子著,白水社,1988)

『ヨーロッパのキリスト教美術』(エミール・マール著,柳宗玄・荒木成子訳,岩波,1995)

『ジロ・ディ・イタリア 峠と歴史』(安家達也著,未知谷,2009)

『自転車ロードレース教書』(砂田弓弦著,アテネ書房,1992)

『イタリアの自転車工房』(砂田弓弦著,アテネ書房,1994)

『イタリアの自転車工房物語』(砂田弓弦著,八重洲出版,2006)

『イタリアンロードバイク&パーツブランド大事典』(樫出版社,2010)

wikipedia 関連情報

(当館スタッフ)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: [centro@italiakaikan.jp](mailto:centro@italiakaikan.jp)

URL: <http://italiakaikan.jp/>